

# みかい

安住院便り  
(第35号)

平成27年8月1日発行

〒703-8236

岡山市中区国富3丁目1-29

住職 生駒琢一

TEL(086)272-2320 FAX(086)273-9327

## 蓮華(レンゲ)

皆さんがご存知の如く、多くの仏様の台座は、沢山の花びらをもつ蓮華で飾られています。蓮華は仏様の清らかな世界を象徴しています。泥の沼地の中から芽を出し、素晴らしく綺麗な花を咲かせることから、煩惱に満ちた私たちの世の中から、美しい心を持つ仏様が生まれることを表しています。

また、お寺の法会などで僧侶が散らす紙片も蓮の花びらを型どり、散華(サンゲ)といわれ、仏様からの贈り物です。

蓮華は、蓮の花と睡蓮の花の両方を指しますが、一般に睡蓮(スイレン)は、その花を樂しみます。それに対し、蓮(ハス)は、花びらの散った後の花托(カタク)、即ち実の入った部分が鉢の巢に似ていることより、ハスと名付けられたとも言われていますが、お盆の御供えにこの蓮の花托を飾られます方も多いと思います。蓮の実は食用になりますが、根もレンコンとして有名です。



岡山市内では七月初旬の後楽園の観蓮節があります。夏に涼しさを与えてくれる花です。当院でも、以前は中庭の池に睡蓮が咲いていましたが、放置するのみであったため葉のみが茂り、取ってしまいました。その後、鉢で少しずつ蓮を育ててきました。植物は全てそうですが、成長の過程が楽しいもので、綺麗な花を見るには、日々の手入れは欠かせません。一年中生きているものですので、葉の枯れた後のことや、植え替えのことも十分意識しなければなりません。

植物と触れ合うことは、「いのち」の大切さを教わるだけでなく、私たちも自然の中の一部であるということを理解する重要な要素なのです。蓮の鉢の中の泥も、決して醜く汚いものではなく、素晴らしい栄養のある大切なものなのです。蓮を育てていると、咲き誇る花だけで無く、鉢や泥も含めて蓮の生長している場所全体が、仏様の世界であると感じるようになってくるはず。そして、私たちが生活しているこの世界が、仏様の世界になれるよう願うのが、大切なことなのです。

皆様も、そのような仏様の世界を思いながら、蓮の花を観賞してください。

合掌

(生駒 善勝) (その⑤)

今年はお大師様が高野山を開かれて千二百年の年です。私が高野山に居た十二年間の最後の三年間は、お大師様が御入定されている奥の院にて勤めていました。そこでの仕事は、朝夕の法要、檀信徒のご先祖様の供養、護摩を焚いての御祈願などです。

しかし更に、お大師様の御霊前への一日二回の食事、また「消えずの灯」を絶やさぬよう守り続けることが、毎日の大切な仕事です。

お大師様への食事は毎日欠かすことなく、一年三六五日朝と昼にお供えています。食事には、肉魚はもちろん、五辛(にら、ねぎ、にんにく、らっきよ、はじかみ)は使いませんが、和食だけではなく中華や洋食など様々な料理やデザートを作り、お大師様が飽きないように工夫しています。また、その日の当番は献立を書き残しておき、次の日

の当番は、同じ献立が続かない様にしています。そして、出来上がった食事は、嘗試(あじみ)地蔵にお供えして、味見をして頂き、それから、お大師様へとお届けします。

もう一つの大切な仕事である「消えずの灯」を守ることは、千年以上続けられていきます。「消えずの灯」は、ローソクではなく、昔のまま、皿に油を注ぎ、中に灯芯(イグサの茎髓)を浸して火を灯します。灯芯の手入れや、油の補充を行わなければ、燃え続けることは出来ません。この千年もの間、絶やさず守られている灯には、色々な物語があります。そのお話は次回にさせて頂きます。

高野山では、一人ひとりが伝統を大切にし、守り続けることにより、歴史が作られている、ということを実感することが出来ました。今の便利な世の中で伝統を守り、後世に伝えていくことこそ、私たちの使命なのです。

摂津観音霊場参拝①

今回より新たに摂津三十三観音霊場の参拝を始めました。摂津の国は、今の大阪府中心部より北部、更に兵庫県南部にかけての地域です。江戸時代には大阪湾に面した中心地で、北東は山城国、南は和泉国、南東は河内国、北西は丹波国になり、今の大阪・京都・兵庫の府県境とは少し違っていました。

第一回目として、摂津国の最南部より、お参りを始めました。四天王寺などの有名なお寺もありますが、由緒ある古刹も多く、天候にも恵まれ、楽しい団参になりました。

大阪には難解な地名が多いですが、喜連瓜破(きれいりわり)や、杭全(くまた)など、実際に標識で確認でき、その由来が気になりました。

次の予定は、十月七日(水)の第二回目ですので、是非ご参加下さい。

